授業探訪　言語教育科目自由科目　〈ドイツ語中級〉

ドイツ現代史を読む

松島　富美代

私が立教大学の教壇に立つようになってから二十年余が過ぎた。教え始めた頃、ドイツはまだ東西に分かれていて、その後、血を流すことなく東ドイツが消滅しドイツが再統一されたとき、遠くからドイツに関心を持ち続けていた人間としては、驚くと同時にドイツ国民と一緒に幸せな気持ちになったものだ。現在の学生たちはほとんどまだ生まれていない。彼らが物心ついたとき、冷戦構造は過去のものとなっていて、おそらく初期の 007 シリーズに代表されるような東西冷戦を自明の背景としたスパイ映画などは、彼らには理解しがたいものであろう。

この二十数年の間に立教大学のドイツ語教育のカリキュラムも、数回変更が加えられている。初級クラスで全学共通の、しかも立教でつくられた教科書を使うようになったのは大きな変化ではあった。しかしその後、2 年生のドイツ語履修が必修でなくなったのは、学生達の語学学習にとって本質的な変化であった。一方、この二十年よりもはるか以前から続いて来たことではあるが、特にこの間、グローバル化の名の下に進んできた英語中心主義。それによって英語以外の語学、とくに明治以後の教養主義に守られてきたドイツ語の位置は大きく変化した。学生達にドイツ語を学習する目的をたずねれば、その多くがドイツ人と話せるようになりたい、と答える。それは多分どの言語においても同じ事情であろう。だが残念ながら、ビジネスでドイツ語が使える所ならば、たいがい英語でＯＫである。ヨーロッパで自国語以外の言語を学習する人々には、英語が圧倒的な人気で、その次はフランス語。「ドイツ語はむずかしい」そうである。ならば、必修でもないドイツ語を学ぶ理由はどこにあるのか。おそらく選択した学生自身、大いに悩んだことであろう。

ことばというものははたして実用のために学ぶものなのだろうか。しかも大学に於いて。それは違う。初級を終える学生には、以後の選択のために、外国語を学ぶことの意味を、我々教師ははっきり伝えるべきであろう。と言っても教師によって考え方は様々であろうが。

私は 2 年生以上の学生達にはとにかく多くのものを読んでほしい。外国語の学習というのは新しい世界を知ることである。ことばそのものが新しい世界である。ich は私、僕、俺、朕、それがし、などいろいろな日本語に訳せるが、実はどれも違う。日本語の一人称は関係性の中に置かれているから、状況によって使い分けなければならないが、ich は ich しかない。そのような、絶対的な ich は私たちの使う一人称とは別の世界にあるものなのだ。そして、そのことばを用いて書かれた文章は、もちろん、新しい、未だ触れたことのない世界を見せてくれる。だから、語学の勉強で身につけてほしいのは、何よりも読む力だ、と私は考えている。

さて、2012 年度、初めて週二回のドイツ語中級の授業を持たせていただいた。しっかりとした内容のものを半年、あるいは一年かけて読みたいと思ったが、対象となる学生は文学科の学生とは限らないので、文芸ではないものを、と考え、シラバスには文法の復習や補

習の後、ドイツの歴史（二十世紀初頭以降）を読む、と知らせておいた。テキストにしたのはManfred Mai著『Deutsche Geschichte』という、2009年に出された、日本の新書のような本で、タキトゥスの記述から始まっているのだが、ドイツの歴史の中で、現代の日本人である我々が知っておくべき事柄は、十六世紀の宗教改革と二十世紀、ナチス治下の暴政や第二次世界大戦の二つであろう。どちらもヨーロッパ人にとっては常識であろうし、とくに後者について詳しく読むことは、この後大人として生きていくうえで何がしかプラスにしていけるのではないか、そう考えて、時間の許す限り、二十世紀初め、第一次世界大戦が始まるあたりから読み始めることにした。

4月のうちは初級でやった文法のうち後半部分、完了形や受動態、関係代名詞、接続法について詳しい復習をした。二十数名の学生のうち約半数がドイツ文学専修の学生だったので、それ以外の学生達の中には不安を訴えてくる者もあった。確かにドイツ語に触れてきた量はかなり違うだろう。だがもともと週二回というハードな時間割を覚悟して来た元気でまじめな学生達（女子が多い）である。何とか頑張ってくれるだろう。文法の復習が終わって、本格的に『ドイツの歴史』を読み始めた。予習の助けになるように、注のプリントをつくって渡しておいた。既成の教科書を使わない場合は、こうした注がないと、むずかしい個所に差し掛かったとき予習が全く進まなくなり、それが予習やひいては授業に出ること自体に嫌気がさしてしまう原因となることが往々にしてあるのだ。これは以前やはり2年生の授業で学生の方から要求されたことがあったので、それ以来、学生達のやる気をそがないように、辞書を引いただけではなかなか読みとれないような言い回しや熟語、文の構造などを注としてあらかじめ知らせるようにしている。それを手掛かりに皆しっかり予習をしてくる。名簿の順に和訳してもらうので、中には自分が当たりそうなところをピンポイントで予習してくる、ということもあるのだが、こうして自分の責任個所が分かれば、その部分は頑張って完璧に訳すべく努力することもできる。著者のマンフレッド・マイは青少年向けの本を書いている人で、この本の中でも時代の思想や政治について決して難解な文章を書いているわけではないが、初級の教科書に出てくる文章とはとにかく桁違いに長くて複雑である。授業時90分かけて何人かで分担して読む分量を、しかも週二回、全部完璧に一人で訳して授業に臨もうとすれば、途中で挫折してしまうことがあっても致し方ないだろう。だから、自分のあたりそうなところだけはしっかり完璧に近く訳してくる、というやり方でも、充分勉強にはなるはずである。前期は第一次世界大戦から、ヒトラーが政権を取る1933年あたりまで読むことができた。高校までの世界史ではこの辺りは詳しく勉強する時間が多分ないので、初めて知ることが多かったはずである。また普通の市民がナチ政権下でどのように適応していったのか、その恐ろしさも分かってほしいところであった。初級の文法書にはあまり説明されていない冠飾句という、ドイツ語独特の語法も、これは実際には頻繁に使われる語法なので、ずいぶん慣れたようであった。

後期にはいって、引き続きドイツ語中級2を履修する学生は思ったより少なかった。前期で疲れ切ったのかもしれない。だが後期から入ってきた学生もあった。後期は前期につけていたような注はつけずに始めてみた。2，3回やってみたところ前期に読み始めた頃よりはよほど読む力がついていて、ときに助け船を出すだけで何とか読んでいけるので、そのまま注無しで続けた。それでも読むスピードはどんどん上がり、前期28ペー

ジ進んだが、後期は50ページ以上進めそうである。第二次大戦は終わり、ニュルンベルク裁判はあっさりと書かれている。それだけでなく、ドイツ人が自分たちで進めてきたナチス犯罪者の裁判については一切書かれていない。すぐに冷戦が始まり、学生達はことばだけは知っていたが、実際はなにを意味するのかあまり知らなかった、という冷戦について知ることとなった。68年運動、という世界中の先進国で起こった若者の異議申し立ては、もう少し前の学生達には想像もつかない運動であったが、反原発の運動が盛り上がっている現在の学生には、少しは身近なものと感じられるかもしれない。ドイツが現在のようにヨーロッパの指導的立場を取るまでに復権した経過を知ることも、彼らにとっては有意義な経験となるのではないだろうか。日本の戦後との比較など、自分自身で調べたり考えたりしてもらいたいところである。さらに時代は進み、ソ連が崩壊して東欧の社会主義国が民主化しても東ドイツはなかなか変わらない。しかし民衆の声に押されてベルリンの壁が文字通り崩れ、ついにドイツが再統一される、というあたりまでを読み終えることができるだろう。学生達にとっては、自分が生まれる前の歴史上の一コマに過ぎない事柄が、当事者の視線で描かれているわけで、日本の世界史の教科書で見るのとは、重点の置き方が違っていたりするのが分かるだろう。

ドイツ語の文章が難しいと、それを日本語に置き換えるのが精いっぱいで、なかなか広い視野で見渡すことができないことがある。この授業の場合も、特に比喩的表現が出てくると、比喩の意味を読み取ることで力尽きているようで、歴史的意義までは到達できていないこともままあるようだった。また、訳した日本語を聴いていると、社会的な関心がちょっとばかり足りないのではないか、と思われることもあるが、この文を読んだことをきっかけとして、社会的視野を広げてくれればうれしいことである。

近年中級向けの教科書は少なくなっているようである。前述したような英語中心主義がはびこっていれば、需要が減ってきているのがその理由であろうか。私にはそればかりではないように思われる。学生が幼稚だ、と言って教師たちは嘆いているが、教科書もそこに合わせているのではないだろうか。中級向けと銘打ってあっても、内容的にも中級らしいものは少ない。稚気を離れるように仕向けるのが、嘆いているものの役目であろう。若い学生達は成長の可能性を秘めている。小試験で縛るのではなく、本当に勉強を楽しむ学生を作り出したいものである。

まつしま　ふみよ
（本学兼任講師）